

‘コシヒカリ’の登熟期高温障害を 軽減するための肥培管理法



掛流し(穂肥無施用)区



間断灌水(穂肥施用)区

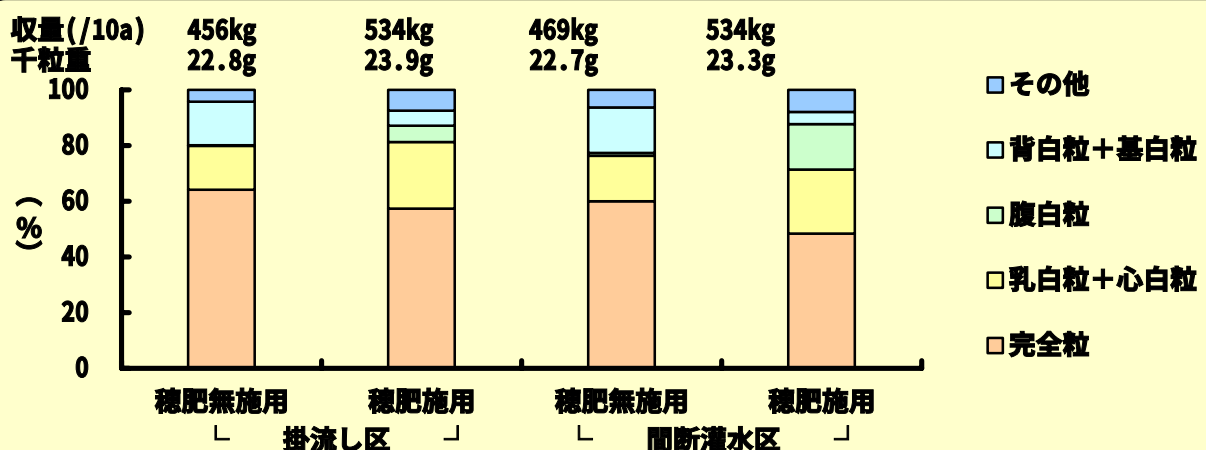


図 穂肥の有無、出穂後の水管理と玄米品質、収量および千粒重との関係(2004)
基肥にはLPD80を窒素成分で5kg/10a、穂肥にはNK化成を出穂14日および11日前に窒素成分で同2kg/10aずつ施用。5月12日移植。掛流し処理は7月21日から8月16日まで行った。

近年、早期水稻‘コシヒカリ’において白未熟粒（心白粒、乳白粒、腹白粒等の総称）が発生し、玄米品質（品位等級）の低下を引き起こしています。白未熟粒の発生には、出穂後の窒素栄養条件と高温が関与していると考えられています。そこで、穂肥の有無と出穂後の水管理（水温）が玄米品質に及ぼす影響について検討しました。

その結果、水管理の違いによって水温、玄米品質に差がみられ、間断灌水（5日湛水2日落水）区に比べて掛流し（成熟期直前ま

で終日）区では、水温が平均1.5℃低く推移し、白未熟粒の発生が少なくなることが分かりました。さらに、穂肥無施用区では完全粒割合が高くなりました。しかし、無施用区では穂肥施用区に比べて収量が低く、千粒重も小さくなりました。

今後は白未熟粒の発生機構の解明とともに、完全米割合を高めつつ、収量、粒重を低下させない水管理、施肥法について検討を進めます。

（水田作物科 坂田雅正 088-863-4916）